

新聞を活用した文章表現 －記事の選択傾向と感想文を通じて－

The Sentence Expression that Utilized a Newspaper －Through Choice and the Impressionistic Essay of the Article－

(2015年3月31日受理)

松井 圭三 今井 慶宗
Keizo Matsui Yoshimune Imai

Key words : 新聞記事, 感想文, N I E

N I Eとは、大学・学校など教育機関で新聞を教材として活用することである。これまで、短期大学保育学科における学生の新聞についての意識調査の分析（2012（平成24）年）、短期大学保育学科・総合生活学科両学科間の学生の新聞についての意識調査の比較（2013（平成25）年）を実施し、短期大学における学生の新聞についての意識や活用実態について研究してきた。2014（平成26）年は短期大学保育学科・総合生活学科と専門学校医療秘書科2年生の学生・生徒を対象として学科・学校種間の比較を行った。これらは、保育学科1年学生・同総合生活学科2年学生及び専門学校医療秘書科を対象に、授業で実施した学生の提出レポートとその感想文の記述内容、および学期終了後に新聞にどのような意識をもっているか、新聞に対して普段考えていること、また新聞を使つての授業に対する意見をアンケート調査したものを分析したものである。今回は、実質的に4本目の研究となるものである。これまで用いてきた資料をもとに新聞記事に対する感想文を分類・分析したものを加え、短期大学における新聞を活用した授業について文章指導面と福祉教育面からさらに考察を行う。

新聞を読まない・ほとんど読まない短期大学生が少なくない。N I E活動として新聞を使つた授業を実践しているが、新聞がまだ学生の身近なものになっていない。学生に新聞を読む習慣・新聞を活用する習慣が身についていないことと、文章表現力・文章指導の関係について分析する。あわせてこれまでも提起してきた課題である、学生が受け身の学習から脱し、新聞に興味をもち、学生自身が主体的に興味のある記事を選択し、学生自ら学ぶ方策についても検討する。本研究で取りあげる科目はすべて社会福祉に関する科目である。文章表現を主とする科目ではない。福祉教育の一環として、学生の文章表現指導・感想文指導をより良いものにし、専門職としてのよりよい実践に結び付けていくためには、授業における新聞実践についてどのように展開を工夫すればよいかという観点から検討し、改善を進めていこうとするものである。

1. は じ め に

中国短期大学学生に課した社会福祉関係の新聞記事についてのレポート・感想文と、学期末に実施したアンケート調査をもとに、学生の新聞に対する考え方、記事の選択、感想文などの文章表現の特徴を明らかにし、文章表現指導と福祉教育の両面から授業展開に求められるものを検討した。

本研究で取り上げる2012（平成24）年度の活動は、学生が積極的に新聞を作成し、受け身の姿勢ではなく能動的に新聞学習に取り組むことを目標とし、卒業後も見据え、学生が情報に流されず価値のある情報を取り入れ健全な社会人になれるよう側面から支援することを目指した。

2. 研究 方 法

2012（平成24）年度も中国短期大学では新聞を使った授業を展開した。保育学科では「社会福祉」、総合生活学科では「ヒューマンケアⅠA」の科目で新聞を用いた授業を行った。

授業では、教員があらかじめ新聞記事を準備し授業中に解説した。また、新聞を全員に配布し、各自で新聞の中から社会福祉関係の記事をスクラップさせ、演習としてその記事を用いてワークシートに社会福祉の制度や施設・機関などを抜粋させ、その語句の意味や施設・機関などの役割を調べさせた（授業の様子は【資料①】を参照）。その後、記事についての感想や意見の記入及びグループ討議をさせた。コミュニケーションの基本能力である読む・書く・聞く・話すのすべてを用いることを展開した。学生自身が新聞をよく読み、その中から関心のある記事を選び出し、表現に挑戦することをねらいとした。授業回数が各15回あるうち、新聞を3回程度活用した。また、松井研究室前には配布される新聞をラックに掛けて置いてある。

保育学科では、前期の授業の中で、学生に記事の種類を問わず最低3回新聞を読ませ、読後の感想・意見、その記事を選んだ理由、新聞名、発行年月日を記入のうえレポートとして提出させた。レポートの字数の制限は設けていない。保育学科学生の1人に対する課題レポートの内容は、分野を限定せず自由に選択することを可とするものが最低3回以上、福祉の記事に限定したものが1回、合計4回以上である。

総合生活学科は宿題として、自由に学生に社会福祉関係の新聞記事を読ませ、記事の概要・感想やその記事を選んだ理由を1000字程度にレポートにまとめさせる課題を2回出した。

さらに学生が前期終了後、新聞を使つての授業に対する意見をアンケート調査し、まとめたものである。読んでいる新聞記事の種類、新聞に対する印象、新聞を利用した授業に対する意見・要望、どのような新聞であれば読むのかを質問した。

3. レポート・感想文の特徴

（1）記事選択の特徴

1）保育学科学生に自由に記事を選ばせた場合 ア 授業科目との関連性が大きい

特に指示がなくとも社会福祉関係の科目（社会福祉・児童家庭福祉・社会的養護・社会的養護内容等）に関連する記事を選択している。その中でも虐待、子育て支援、子どもたちの生活、保育者と子育て相談、児童養護施設と里親、子どもへの支援、生活保護、住民基本台帳の閲覧制限など児童・家庭に関する記事が多い。介護と介護予防、老後と死、障害者の生活、発達障害、障害児、自閉症等、高齢者・障害者の福祉にかかわるものもみられた。

また、教育学に関連する記事を選択している者もみられる。さらに、「子どもの食と栄養」や「子どもの保健」など関連科目に関する記事もみられる。これらのことから、取得する資格・免許の性質が影響していると考えられる。福祉関連の制度・政策の分野についてはあまり読んでいない。

イ 進路に関する記事

短期大学という性質上、早期からの就職活動を意識していて、就職難や労働と家庭に関する記事にも関心を持っている。

ウ 全く関連ない記事を選択する者もいる

社会福祉や教育とは別の分野に関心を持ち選択する者も少なくない。しかし、法律・政治・経済などへの関心はやや低い。福祉に関する記事の中でも、社会保障や子どもに関する政策を選択した者は多いとはいえない。法学や経済学などの社会福祉学以外の社会科学を専攻している4年制大学の学生との関心の差が潜在的にあると考えられる。

エ 記事を選択した理由

学生にとって身近なこと・普段かかわっていることを手がかりに記事を選択している。政治・経済など国家全体にかかわる事柄よりも、身近にあって知っていて、具体的にイメージできる物事について関心を向けている。

2）保育学科学生で福祉の記事に限定した場合

ア 授業科目との関連性が大きい

この点は、学生に自由に記事を選ばせた場合の特徴と

共通している。児童福祉に限定しているわけではないが、保育学科の授業科目（社会福祉・児童家庭福祉・社会的養護・社会的養護内容等）に関連する記事を選択している。その中でも少子化、虐待、子育てや福祉一般に関する記事が多い。介護、高齢者福祉、障害など高齢者・障害者の福祉に関するもののほか、年金や社会保障と税の一体改革、生活保護など政策に関するものの割合もやや高くなっている。教育をテーマとするものもある。福祉とやや離れたテーマの記事を選択した者も少なからず存在する。

イ 読もうとしたきっかけ

この場合も、身近なこと・普段かかわっていることが中心である。

3) 総合生活学科の場合

学生が複数選択している記事として、音楽療法、中学校のいじめ、鉄道構内のバリアフリー化などがある。保育学科のように児童福祉・幼児教育を選択した者が多数を占めるという傾向は認められない。むしろ、未成年後見人、介護、てんかん患者、認知症、福祉葬など障害者・高齢者と結びつきのある記事が多く選択されている。この学科は本調査当時は訪問介護員養成研修（現在は介護職員初任者研修）修了を目指しているという性質から保育学科との相違が出ていと考えられる。

（2）感想文の特徴

保育学科の感想文（記事を自由に選択、福祉の記事限定）及び総合生活学科の感想文のサンプルは末尾に【資料②】として示している。感想文については、字数・様式について厳密な決まりを設けなかったが、その内容について特徴を挙げると、学科やテーマに応じて以下のような特徴が見られる。

1) 保育学科

① 記事を自由に選択させた場合

学生が取り上げた話題が一定の事柄に集中している。例えば感想の主要な内容が、「いじめ」については21件、「子ども」は20件、「保育士」ないし「保育者」が11件、「虐待」が10件である。自由に記事を選択させた場合も社会福祉との関連性で選択している。学生が幅広い選択をすることも可能であるが、レポートを課された授業科目が社会福祉に関する科目であることによって自己規制として社会福祉関連の記事を選択したのか、社会福祉以外の

ことへの幅の広がりが見られないかのさらなる分析も必要である。

感想内容の傾向としては、新聞記事に率直に賛同し、それを是とした上で、社会に向かって何々してほしいという要望を述べるものが中心である。他方、インターネットを利用するうえでマナーを守ろうと思う、アルバイトでも心温まる接客やサービスをしたい、児童虐待を減らすためできることはないか考えようと思った、など自分から主体的に何かに取り組もうとする感想は多いとはいえない。文章表現や情報に関する感想としては、「漢字はしっかりと子供のうちに身につけなければならない」、「通知表を正確に書けない教師に子供の将来は任せられない」、「インターネットやブログがすべて正しい内容ではないとわかり怖かった」、「鉛筆の持ち方を直したい」という本人の強い意志が大切」、「新聞は社会問題や福祉について多くの記事があり参考資料に最適」、「親子で絵本に親しみながら向き合う時間は大切」などがある。しかし、感想文全体に占める割合が小さい。

2) 福祉の記事に限定した場合

感想内容の傾向は、記事を自由に選択させた場合と類似している。新聞記事に率直に賛同し、それを是とした上で、社会に向かって何々してほしいという要望を述べるものが多くを占める。例えば「経済が安定したくさん産んでも子育てが可能な社会になってほしい」という内容がある。そのために何を自分は出来るか、どう取り組むかという文章は多くない。しかし「教育訓練給付制度を上手に使い能力を高めたい」、「プロとして必要な褒め方を身につけたい」など自分から取り組もうとする感想は記事を自由に選択させた場合よりは若干多く見られる。福祉は所属学科の専門科目であり、問題解決の方法、少なくとも方向性が理解できていることが背景にあると考えられる。

② 総合生活学科

感想全体を通してみて、「24時間対応をクリアし在宅医療を拡充してほしい」、「多くの会社が障害者の就労を受け入れるべき」、「音楽療法を医療・福祉施設でもとりいれ障害軽減を図ってほしい」、「外国人介護士増に賛成、虐待ケアの専門家に頑張ってほしい」、「虐待事案の原因を究明し問題点を改善してほしい」、「障害者が現実に大学進学を可能とする環境を作してほしい」、「障害者へ

の対応について小学校以降の各レベルで取りあげてほしい」など新聞記事に率直に賛同し、それを是とした上で、社会に向かって何々してほしいという要望を述べる感想が中心である。一方で「視覚障害者への理解を深めたい」等のように自ら取り組んでみたいという段階に至っている感想は多くない。

記事の内容を正しく理解しそれに対して賛同を表明していること自体は、文章の読解という観点からはよいことであると考えられる。しかし、その理解したことを考察し発展させるところには至っていない。内容理解にとどまらず、自分がその立場に置かれていたならば、何をすることができるか表現する取り組みも必要であると考ええる。また、感想文の大部分が記事をそのまま引用して感想が乏しいものもある。記事内容を是とする少量のコメントを書いているのは、実質的に考察したことになるのか疑問も残る。「年金制度を改正し将来必ずもらえるようにしてほしい」のように短絡的に結論を出して、前提となる内容が十分理解できているのかがその文章からは不明なものもある。感想文中に新聞記事に出てくる単語がそのまま用いられているが、その単語の意味を深めたり、単語を用いて文章を組み立てている者は少ない。

（3）感想文の提出割合

レポート提出数は、保育学科（学生数128人）で記事の種類を自由とした場合が466、福祉の記事に限定した場合が126、総合生活学科（学生数46人）は38であった。学生1人あたりの平均の提出数は、保育学科で記事の種類を自由とした場合が3.64、福祉の記事に限定した場合が0.98、総合生活学科は0.83である。提出割合を見てみると、保育学科で記事の種類を自由とした場合に最低3回求めているのに対して121%、福祉の記事に限定した場合が1回求めているのに対して98%、総合生活学科は提出の回数を2回求めているのに対して41%であった。

保育学科において記事を福祉分野に限定した場合が提出割合が高い。授業内容と関連のある記事の場合、授業で基礎知識を身に付けていることから感想文に取り組みやすいことが考えられる。学科間の相違として、総合生活学科の提出割合が低いことが指摘できる。

4. アンケート調査の結果の中で文章表現・情報収集に関わると考えられる回答

2012（平成24）年7月、新聞に対するアンケート調査を実施した。その中で、学生の文章表現や情報収集についての考え方が分かる回答内容として次のものがある。なお、学生の記載内容は多岐にわたるが、文章表現や情報収集に関する項目に限って抜粋している。

① 保育学科1年生学生128人

Q 新聞に対する印象は？（自由記述）（原文を記載）

- （1）堅苦しく難しい（50回答）
- （2）文字が多い（11回答）
- （3）文章の区切りがわからない（3回答）
- （4）面白い記事もあるけどほとんど字だけで読む気にならない
- （5）読む必要がわからない
- （6）文字が書いてあって、後で何日も読み返せる
- （7）字が小さいくせに何が言いたいかわからない
- （8）見出しが大きくてわかりやすい
- （9）読むのに疲れる
- （10）新聞は自分で自由に読めるからいいと思う（2回答）
- （11）文章力がつくのでいいと思う

Q これからも新聞を使った授業を実施するが、何か要望・意見があるか？（原文を記載）

- （1）社会福祉のレポートですが、どんな記事でもいいかにしてほしい（2回答）
- （2）保育学科なので、子どもに関する記事などをまとめていきたい
- （3）新聞を読む機会が増えていると思う
- （4）宿題として使う記事が何でもいいというのはいいと思った
- （4）新聞は難しい

Q どのような新聞であれば読もうと思うか？（自由記述）（原文を記載）

- （1）カラーで写真・イラストがたくさんある新聞（24回答）
- （2）文字が大きく、読んでわかりやすく、理解しやすい記事（20回答）

- (3) 字と字の間に隙間があって見やすい記事 (3 回答)
- (4) 何が言いたいのか、はっきりわかる新聞 (2 回答)
- (5) 大きな見出しのある記事 (2 回答)
- (6) 言葉・用語の意味を解説しているものであれば読みやすい
- (7) 記事の境がわかりやすい
- (8) 難しい言葉が使われていなかったら読もうと思う

- (4) 短時間読んでも要点だけはわかるような新聞
- (5) アニメや子どもが読めるコーナーがあればよい
- (6) 冊子状の新聞
- (7) いろいろ解説がついていて、詳しく書かれている記事

5. アンケート結果から

1) 保育学科 1 年生

新聞を教材として用いるとき、文字を読むことは避けられない。しかし、その文字に関してよい印象を持っていない回答がみられる。「文字が多い」「面白い記事もあるけどほとんど字だけで読む気にならない文章の区切りがわからない」「字が小さいくせに何が言いたいかわからない」「読むのに疲れる」などは有益な内容であっても文字で表現されていると、その文字を読ませる動機付けがなければその内容が学生に届かない。「読む必要がわからない」という回答に至っては有益な情報が含まれていることを理解させるところからはじめなければならない。

これは「どのような新聞であれば読もうと思うか？」に対する回答でより鮮明になっている。「カラーで写真・イラストがたくさんある新聞」が最多 (24 回答) を占めている。「文字が大きく、読んでわかりやすく、理解しやすい記事」(20 回答)、「字と字の間に隙間があって見やすい記事」(3 回答)、「記事の境がわかりやすい」(1 回答) などは、文字を読むという抵抗感を写真・イラストで代替することによって軽減できる可能性を示している。文字がある場合でも、これまでのような常識で、縦書きで行と行との続き方も含めずと理解できるという姿勢を改めなければならないことを示している。

他方「文字が書いてあって、後で何日も読み返せる」「新聞は自分で自由に読めるからいいと思う」というように読む習慣のある学生には情報の提供・保存・整理の手段を提供している。

また、本研究で問題としている文章表現・文章指導という観点からは、新聞によって「文章力がつく」ことを理解している学生が、少数ながら存在することに注目すべきと考える。次の質問に対する回答の中に登場する「新聞を読む機会が増えていると思う」は「書き」と対にな

② 総合生活学科 2 年生学生 46 人

Q 新聞に対する印象は？ (自由記述) (原文を記載)

- (1) 字が多くて難しい (19 回答)
- (2) 大まかに読むと内容を把握でき、読むことができた
- (3) 広告と記事の区別がつかない
- (4) 一面以外は読みにくい
- (5) 興味のある記事は読みやすいが、経済とかは難しくて理解できない
- (6) 写真はカラーだと見やすいし、最近の記事は字と写真が見やすく小さすぎないからいい
- (7) 専門用語が多く、記事を理解するのに時間がかかる

Q これからも新聞を使った授業を実施するが、何か要望・意見があるか？ (原文を記載)

- (1) 今までと同じでよいと思う
- (2) 新聞を使ったレポートで 1000 字を書くのは大変なので、半分の 500 字程度がよい
- (3) 新聞を読んだりすると、読む力もつくし、今の世の中を知れるのでいい機会だと思う
- (4) 私たちが興味を持ちやすい親しみのある記事を使用してほしい
- (5) 新聞の大きさがでかい
- (6) 新聞のテーマが見つけにくい

Q どのような新聞であれば読もうと思うか？ (自由記述) (原文を記載)

- (1) カラーで図・写真があればよい (19 回答)
- (2) わかりやすい記事 (4 回答)
- (3) 今まででよいので進んで読みたいと思う

る「読み」の部分に対する肯定的な回答であるが、これも回答数としては少ない（1回答）。

新聞を使った授業への要望では、レポート課題への関心が高い。「どんな記事でもいいとかにしてほしい」「宿題として使う記事が何でもいいというのはいいと思った」などは、新聞を読むこと自体には大きな困難は感じていないが、その選択する内容によってレポート課題についての表現のしやすさ・しにくさに直結していることを学生が感じ取っていると考えられる。

分量や形式面だけではなく、文の意味の理解も授業の中で行わなければならないことが示されている。社会福祉学は、法令や社会保険、さらには医療用語も登場し、もともと理解が難しい面がある。回答に示されている「言葉・用語の意味を解説しているものであれば読みやすい」、「難しい言葉が使われていなかったら読もうと思う」が何を意味しているのか、学生の学力不足の傾向を示しているのかは、継続調査により明らかになると考える。

2) 総合生活学科2年生

形式面では、「字が多くて難しい」が19回答で突出している。一方で、どのような新聞であれば読もうと思うかについては「カラーで図・写真があればよい」がこれもまた19回答である。白黒で文字が多いものに対してよい印象をもっていない。「新聞の大きさがでかい」、「冊子状の新聞」ならば読もうと思う、などもある。

内容面では、「わかりやすい記事」を求めている（4回答）。「興味のある記事は読みやすいが、経済とかは難しく理解できない」、「専門用語が多く、記事を理解するのに時間がかかる」という回答に代表されるように、最初から難しいという印象をもっている。「いろいろ解説がついていて、詳しく書かれている記事」というように詳しい内容を求めている者もいる。

保育学科のような、新聞によって文章力がつくことを指摘する意見は表れていない。新聞が情報の提供・保存・整理の手段となっているという意見も見られない。

3) 両学科のアンケート調査の比較（国語の観点から）

① 新聞に対する文章表現の観点からの印象

保育学科は、新聞に対して肯定的な印象を持っている回答が多くみられる。新聞の内容面から肯定的に評価すると同時に、自分自身の読解力・表現力を養うことにも新聞が有効であるととらえている。総合生活学科2年学

生の回答の特徴として、新聞内容の豊富さを指摘し、かつ正確性・信憑性の観点から前向きな印象を持っていることを挙げることができる。

両学科に共通して、新聞に対して注文も多く出ている。文字が多い、区切りが難しい、必要な記事の位置がわかりづらいなどである。紙面構成にさらに工夫があれば読みやすくなると考えている。

② 新聞を使った授業を実施していく上での要望・意見
保育学科の学生の中には、この授業が新聞を読む機会になると考えている回答もある。

総合生活学科は、レポートの字数などを調整してほしいなど授業における課題提出方法に関心を有している。両学科に共通して、授業については、新聞を読みたくなるような授業展開を希望する、わかりやすい内容や身近な内容を取り上げてほしい、また新聞記事に慣れることを重視してほしいという意見がある。

3) どのような新聞であれば読もうと思うか

保育学科は、新聞のサイズや見出しのあり方、写真やイラストの量など紙面に工夫を求める意見も多く出されている。総合生活学科は、短時間であっても読むことができるように要点をまとめているもの、学生が興味をひくものであれば読みたいと考えている。

6. 考察と課題

（1）考察

本調査結果からも、概念把握や読解力に課題があるのではないかと考えられる者が見受けられる。従前のように、高校段階までに国語科・地理歴史科・公民科において最低限共通する一定の科目を履修しているわけではないことに配慮しなければならない。これまでの新聞を使った授業の研究からも学生の中には高校段階までに培われるべき概念把握や読解力に課題がある者も少なくないことが明らかになっている。短期大学入学時点での学力が極めて多様化していることを踏まえた上での指導が必要となる。新聞を読ませるにしても、新聞内容を読解し論を展開する前段階として国語や社会に関する基礎的な概念を把握させるところからはじめなければならない。

新聞を日常的に読んでいない学生が少なくない。本研

究でデータを取るために対象とした授業においても新聞を用い、新聞を読み要約し意見を書かせるレポートを課しているが、まだまだ新聞が学生に身近なものとなっていない。学生にとっての関心は、身近なこと・普段かかわっていること・高校までで体験したことが中心である。それに加えて、さらに広い視野で社会について考えさせる機会を多く提供する必要である。

新聞の実践授業として、社会福祉の記事を教員が準備し、教科書に関連した内容を解説し、授業を展開したが、この方法については一部の学生から不満があった。学生に興味のある記事を選択させ、学生自ら学ばせる方法を試みることも必要である。また、高校までの知識を整理し、大学で学ぶ内容の橋渡しとなる内容の記事を教員が意図的に選択する必要性も忘れてはならない。その中には、高校までに習っていない政治や社会の仕組みについて取り上げることもあるが、あわせて概念把握に重要となる語句や考え方も含まなければならない。地理歴史科・公民科の要素だけではなく国語科の要素も含むべきである。

これまで論じてきた中で課題として挙げ続けていることとして、学生が受け身の学習から脱し新聞に興味をもち、学生自身で興味のある記事を選択し学生自ら学ぶ方法は何か、がある。学生にどのような新聞ならば読みたいか質問したところ、保育学科1年生であれば上記結果以外にも、子ども・保育関係記事(14回答)、スポーツ・芸能関係記事(11回答)、楽しい面白い記事を増やしてほしい(7回答)、地域のことが載っている新聞(4回答)、スポーツ記事(3回答)、若者向けの内容(3回答)、社会福祉の記事(3回答)、心温まる記事(2回答)を挙げている。文章力を向上させるためには、多様な種類の文章をよく読み、自分でも表現してみることが欠かせない。そのためには、興味・関心のある記事を取り掛かりとして文章を読解する力をつけ、その後に関心の幅を広げていくことも必要ではないかと考える。

ただし、資格・免許に関わる教科・科目の場合には、国家資格・公的資格取得のための学習内容が法令で決められていて、その範囲での記事を学生に選択させなければならないこととの整合性が必要となる。

(2) 課題

新聞実践としては、新聞を読むということから一歩踏

み出し自分たちで作ってみる経験も大切である。新聞を作ることによって、見出しの取り方・文章の書き方も考えなければならないから、この面の指導が可能となる。保育学科2年生学生には、2013(平成25)年1月28日、学内において、新聞づくり講習会を開き、山陽新聞社NIE推進部の中田秀哉部長(当時)から、新聞の役割や記事の構成、見出しの付け方などの説明を受け、新聞づくりを進めた。2年間の思い出が詰まった「卒業記念新聞」を製作した。卒業記念新聞はA3版で、両面カラー印刷である。表面には講習会の様子を伝える記事やオープンキャンパスの模様を写した写真、クラス全員の氏名を掲載し、記事には全員で考えた「羽ばたけ!若者よ!」の見出しを付けた。「学生時代の記念になる新聞ができた。春からは社会人になるが、新聞に毎日目を通すようにしたい」との感想を述べる学生がいた。新聞を作る機会をさらに設けなければならない。

新聞を使った授業の実践効果を今後調査し分析することが必要である。その中には新聞をよく読んでいる学生とそうでない学生の文章記述量や誤字脱字の多寡といった計量的な比較・分析も必要である。新聞実践を行う前と後での文章記述量や誤字脱字の頻度の変化も調べられると考える。一方で、学生はこの授業だけで文章表現や語句についての学習をしているわけではない。日常生活においても同じである。自然科学のように他の要素を排除するわけには行かない、という限界もある。

社会福祉科目でNIE実践をすることで文章表現力がどのように向上するかという観点からは、4年制大学や専門学校のような異なった学校種別との比較も必要である。本研究は主として社会福祉学を専門とする教員からの見方であるが、国語の専門家からは別の観点も考えられる。

これまでの研究で明らかにしたように、短期大学学生であっても、新聞を読まない・ほとんど読まない学生が6割を超えている。これら学生にまず「読む」という行為をさせるためのきっかけ作りからはじめなければならない。これからもより良い新聞実践授業を目指し学生の文章表現力を向上させていくことが重要であると考え

参 考 文 献

- ・村上治美「大学生に必要な文章表現力とその指導方法」東海大学研究資料集 7（1999）
- ・日本N I E 学会編『N I E ハンドブック』明治図書（2008）
- ・橋本美香・見尾久美恵『初年次教育におけるNIEの導入：「文章表現」での取り組み』日本NIE学会誌 第7号（2012）
- ・松井圭三・今井慶宗「教育課程における新聞活用—保育学科の福祉教育での学生の意識調査の一考察—」中国学園紀要第13号（2014）
- ・松井圭三・今井慶宗「福祉教育における保育学科学生の新聞記事検索の指向についての一考察」福祉図書文献研究第13号（2014）

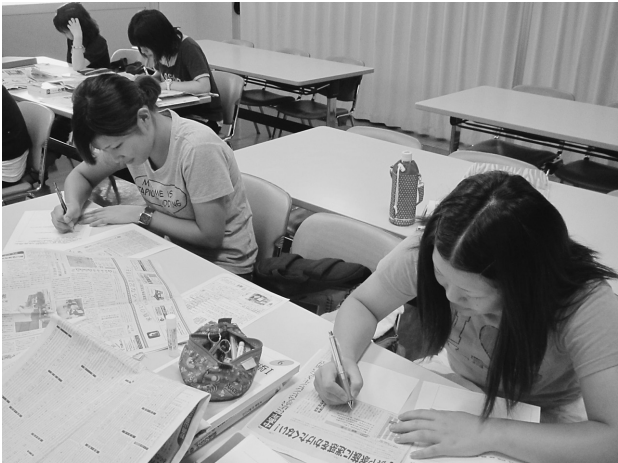
【資料①】

中国短期大学でのN I E 授業実践の様子

1. 学生が新聞を読んでいる様子



2. 新聞記事を読んだ後、学生がワークシートに記入している様子



【資料②】

保育学科で記事の種類を自由とした場合、福祉の記事に限定した場合及び総合生活学科の感想（要約）についてそれぞれサンプルとして25ずつ示す

1. 保育学科 感想（要約） 福祉の記事に限定

6歳未満の児童からの移植について家族が提供承諾をすることも一つの方法
安定した生活を支える仕事があれば少子化問題も解決につながる
生き生きと過ごす高齢者に学び支えていかなければならない
イクメンの増加により女性の社会進出の手助けや少子化対策になる
いじめが発生する周りの環境を変えることが減らす第一歩である
いじめについて加害者も学校も謝罪すべき
いじめの実態を公表しない学校など自殺の原因はいじめだけではない
移植など高度な医療技術を全国に伝えてほしい
一生懸命勉強し家族を守り生活保護を受けず生活したい
一体改革で増税になると生活が苦しくなる人が増える
癒し商品強化で集客が期待できる
絵本は人とつながり勉強もでき楽しめるから大切にしなければならない

園児の見守り活動は児童安全確保と地域との関わりで一石二鳥
多くの外国人が日本で介護を学べる環境ができればよい
多くの人が少子化の現状を知り子育ての楽しさが伝わればよい
音楽療法が進歩してほしい
介護・看護の報酬を見直し介護サービス増を図るべき
外国人に頼るばかりではなく日本人の介護士を増やす施策をしてほしい
介護サービスを気軽に受けられるようになってほしい
介護サービスを利用するのに長い道のりがある
幼児教育を無償化しより多くの子供に教育の場を与えるべき
連携型のサービスが少ない
老後のために働いてためていけばよいはずでそもそも年金は必要か
老人クラブの解散に歯止めをかける方法はないか
若いうちから定年後の生活費を確保しておきたい

2. 保育学科 感想（要約） 記事の選択自由

子どもの頃からたくさんの人に甘えられる環境であってほしい
各自が自分の考えを見直せば障害・難病のある人にも住みやすい社会となる
地域の行事に参加し家族と触れ合う時間が大切である
虐待もいじめも周囲の見て見ぬ振りがいけない
常識・ルールをわきまえて生活していこう
里親と里親を支援する人の連携がうまく成り立つようにしてほしい
親になる人は責任感・思い遣りの心を忘れず子育てをしてほしい
食事ができることに感謝し、それを次の世代に伝えていくべき
日本脳炎ワクチン接種の副作用情報を早期に公表すべき
保育者としてアレルギーによる死亡事故を起こしてはいけないと思う
登下校の安全のため地域住民との連携が大切

自分の住んでいる県の子育て支援の実態を理解しておきたい
虐待の早期発見が子供の命を救う
先輩の働く姿・生き方は自分の未来を想像することに役立つ
保育所・幼稚園にも情報交換のスペースを設けるべき
自閉症を一人でも多くの人が理解することが大切
難病の人たちに安心して旅行できる施設があることを知ってほしい
住民票閲覧制限を利用できるケースを増やしてほしい
いじめられている子どもは小さな相談でも最大限の勇気がいる
家族は将来もずっと一緒に欠かせない
英語教育が正しい手順でなされれば身につく
就職困難は怖い
虐待に一刻も早く気づき心のケアやカウンセリングをしていきたい
発達の悩みを相談できる施設があると保護者が安心できる
親には感謝しなければならない

3. 総合生活学科（要約） 感想

年金制度を改正し将来必ずもらえるようにしてほしい
バリアフリー化により高齢者や障害者でなくとも使いやすくなる
節電で障害者に我慢を強いるのは無責任
「認知症」と「在宅ケア」の単語が結びついていることに興味
認定こども園拡充を願う
就職難による自殺者が減ることを望む
介護職員の待遇改善をしてほしい
障害者が現実的に大学進学を可能とする環境を作ってほしい
虐待の通告で救われる命がある
音楽療法士にあこがれ
いじめは将来への不安を紛らわせるための標的づくり
軽度障害者にも雇用を
視覚障害者への理解を深めたい
虐待事案の原因を究明し問題点を改善してほしい
いじめの隠ぺいが気になる

少年法を改正し加害者を厳罰に
行政は一人一人の高齢者の実情を把握しておくべき
高齢者の在宅での生活を重視すべき
音楽療法を医療・福祉施設でもとりいれ障害軽減を図ってほしい
てんかん患者が運転を続けることには賛同できない
音楽療法を診療報酬の対象にしてほしい
虐待ケアの専門家に頑張ってほしい
初期のうちから認知症ケアを受けるべき
災害弱者へのしっかりした対策が必要
デイサービスでの宿泊の事故は職員増で防止すべき